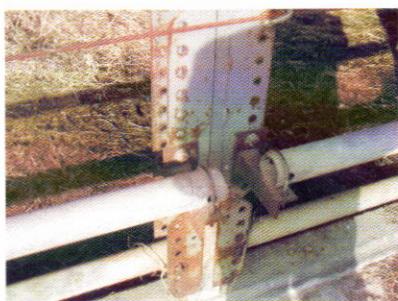
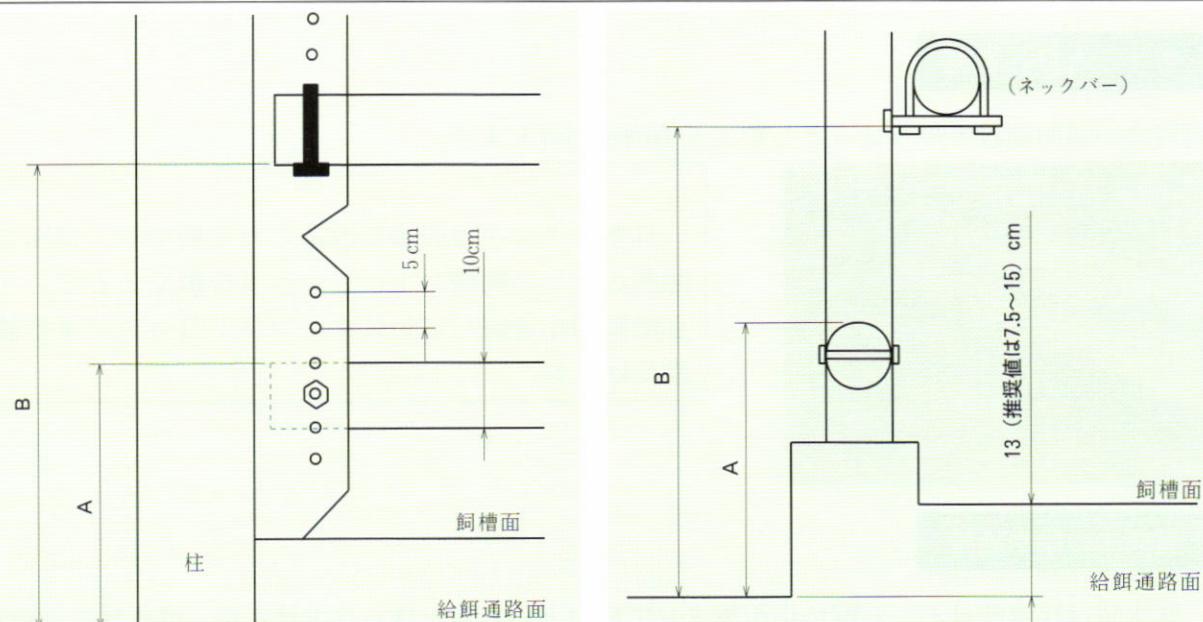


# 育成舎の給餌・給水・捕定施設

離乳後の育成牛は群管理が基本になります。群管理でのポイントは飼料が平等に食べられること、自由に飲水出来ること、そして捕まえやすいことです。これらを満たす施設は良好な発育を促し、管理作業を容易にします。

## 育成牛舎の給餌施設

給餌施設は、粗飼料がいつでも自由に好きなだけ食べられる状況であることが必要です。そのための管理として、休息エリアと給餌エリアをはっきり分けて、設置しておくことです。餌を食べるときは飼槽や草架台で、休息するときは放牧地やストールでという具合です。また、牛にそのような行動をとらせるために休息施設、給餌施設の整備を行う必要があります。



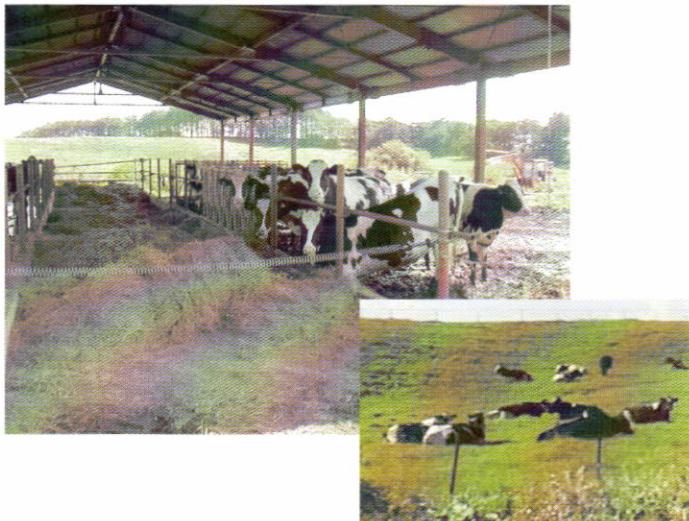
群	月齢	体重 (kg)	寸法A(cm)	寸法B(cm)
1	4~5	138~170	47	75
2	5~6	170~205	47	81
3	6~8	206~271	52	91
4	8~10	272~338	57	95
5	10~12	339~420	57	99

N牧場の開放型のフリーストール育成舎です。この農場では優れた育成管理技術、及び優れた育成施設によって、非常に良好な発育を見せてています。

育成舎は牛のサイズにより、5~6頭ずつ群分けされています。

ネックバーはボルトで柱に取り付けられています。写真の様に柱に細工を施することで、ネックバーの高さ調節が容易になっています。

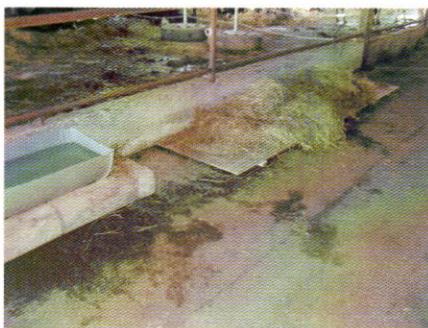




屋根付の屋外給餌場です。給餌場の周辺をコンクリート舗装にし、放牧地を寝場所にしています。給餌場や草架台周辺は草を引き込んでそこに寝る牛がいるので、こまめな清掃が必要です。

## ちょっとひと工夫

育成舎の給餌施設でのちょっとした工夫事例を紹介します。



### コンパネを利用した飼槽

D型ハウスを育成舎に改造した事例です。傷んで凹凸が激しい飼槽の上にコンパネを敷くことで、平らな飼槽を実現しています。コストはコンパネの値段だけです。

## 育成牛の給水施設

飲水時は採食時ほど、一度に牛が集まって飲むということはありませんが、飲み易さと給水器周辺の糞尿除去が、容易にできるように設置する必要があります。給水施設の設置数の目安として、少なくとも20頭当たり一基必要です。育成牛は1日につき体重100kg当たり12.6Lの水を必要とします。

冬はしっかりした凍結対策が必要になりますが、夏の放牧地やパドックでの給水は、簡易的なものでも飲水量を確保することができます。



フタ付き、または地熱利用型不凍結給水器は、小さな牛では力が弱く飲めません。そのためフタを外します。こうすることにより月齢に関係なく給水でき、飲水できる範囲も広がります。

ガスボンベを切断し、足をつけてホースをつないで給水します。フロートで水量を調節でき、持ち運びが楽なので牧場から近いパドックや放牧地での給水に便利です。

